

こんにちは、わたし、**ゆきのん**  
四つ葉のクローバーの妖精だよ

このクローバーを風に乗せて  
世界中を飛んでいるの



今日は、わたしが春の季節に  
出会った女の子のお話をするね



ゆきのん物語

# 紅色の花びら

文・絵 うなむ

その日、ゆきのんは、

あたたかい春の風に乗って、

クローバーで空を飛んでいました。

すると、どこからか声がします。

「えーん、えーん。」

誰かが泣いているようです。

「あの山の上から声がするわ。」

ゆきのんは、声のする方に

行ってみることにしました。



そこには、

大きな木の根元で、

シクシクと泣く

女の子の姿があります。



「どうしたの？」

ゆきのんは声をかけました。

「桜の花が咲かないの。」

その女の子は言いました。

「桜の花？」

ゆきのんは見上げて、

その木が桜の木だということに

気がつきました。

「でも、少し咲いているわよ。」

確かに、木の枝の先には

白い桜の花が

ちらほら咲いています。



「違うわ、そんな色じゃないの。」

それに、いつもはもっと

たくさん味かせられるのよ。」

「あなた、この桜の木の妖精なのね？」

「ええ、そうよ。」

でも、今年は上手いかななくて、」

「それで、大声で泣いていたの？」

「だって、

どうしても味かせたいんだもの。」



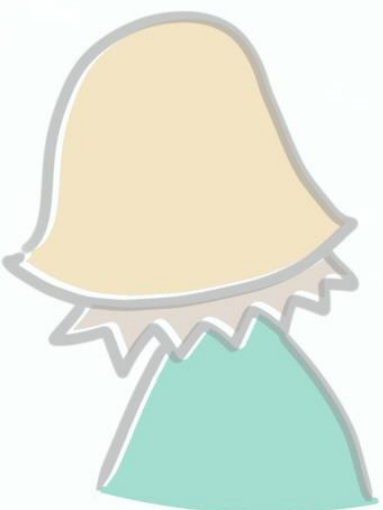


「なぜ？」

「春になると、

私の桜を見に

来てくれる人がいるから。」



そう言って、

女の子はまた、

シクシク泣きだしました。

ゆきのんは、

その子の肩に

ポンと手をのせて言いました。



「ねえ、私はゆきのん。」



私もクローバーの妖精なの。

あなたの名前は？」



「あなたも妖精なの？」

私の名前は、ベニカよ。」

「ベニカ、その話、

もう少し詳しく聞かせてくれる？」

「うん、わかったわ。」



ベニカは涙をぬぐって

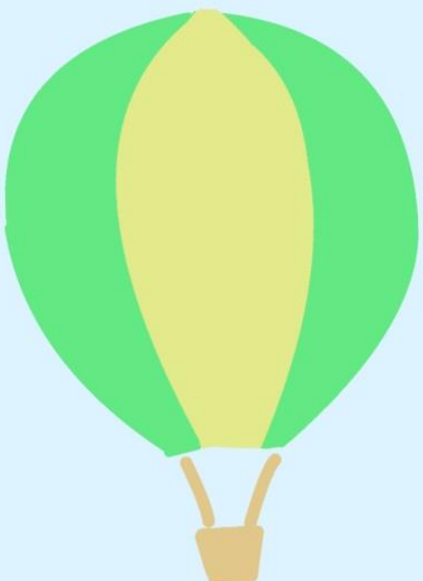
話し始めました。

十年前に、

ある人が気球に乗って

ここにやってきました、

この桜の苗を植えたの。



その人は、世界中に

桜の木を広める活動を

してらっしゃいわ。



彼は、すごく桜を愛していて、

苗だった私にも、

たくさん話しかけてくれたの。

私は、

それがとても嬉しくて

年に一度だけ

この季節にやってくる彼を

喜ばせたくて、

毎年、毎年、必ず、

うす紅色の桜を、満開に咲かせたわ。





彼は、

その満開の桜を見るたびに、

すぐく嬉しそうに笑うの。

私は、その笑顔を見るだけで、

とても幸せな気持ちになったわ。



そんなことが数年ほど続いて、

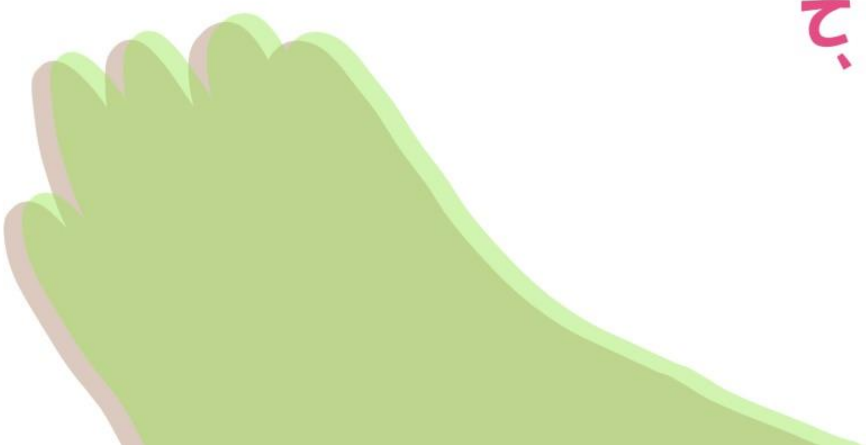
「私は彼と話してみたい」

と思うようになったの。

そうしたら、去年、

山の神さまが力を貸してくださって、

私を妖精にしてくれたのよ。



でも、なぜだか

私は、

彼に話しかけることを

急にためらってしまって、

結局、木に隠れて

そっと彼を見ることしか

出来なかった。





彼は、

そんなことも知らずに、

変わらない優しい笑顔で、

この木に話しかけてくれたわ。

そして、

また来るから、と

いつも通り、

次の場所へ行ってしまったの。



それが

いつもより

とてもとても

悲しくて、



彼の気球が見えなくなっても

ずっと、見つめていたわ。

「だからね、

《今年こそは彼に話しかけよう》

と決めたのに、上手く咲かないのよ。

今まででずっとやって

桜を咲かせていたのか、

まったく、

分からなくなっちゃってしまっで。」

「それは困ったわね。」

「そうなのよ、

早くしないと彼が来ちゃうわ。」





「その彼、とっても素敵なんなのね。」

「うん、すごく優しくてカッコいいのよ。」

「ベニカは、

なぜ彼に話しかけなかったの？」

「たぶん、怖かったのね。」

「何が？」



「もしも嫌われて、

彼と会えなくなるかもしれないって。」



「うふふ。」

「ゆきのん、ぎゅっして繋ぐのっ。」

「ベニカは彼に恋しているのね。」

「いいっ?」

「彼のことが大好きっていいよね。」

そのゆきのんの言葉に、

ベニカは胸のあたりが

熱くなるのを感じました。



「そう、これが恋なのね。」

初めて気づいた自分の気持ちに

ベニカは感動していました。



「私は、彼が好き。」

ベニカがそう言つと、

突然、大きな風が吹き、

桜の花が次々と咲き始め、

数分と立たないうちに

ベニカの桜の木は

満開になりました。





それはそれは、

見事な紅色の花びらです。

「わあ、キレイ。ベニカすごい。」

ゆきのんは感激して言いました。

「咲いた、咲いたわ。」

ベニカも喜んでいます。

「あなたが彼を想う気持ちが、

この桜の栄養になっていたのね。」



「そういえば、

前に彼が言っていたの。

ここに植えた桜だけ、

いつも紅色だって。

他の桜は白いのに、

不思議だって。」

「ベニカの想いが、

花びらを紅色に染めたんだわ。

誰かを好きという気持ちって

本当に素晴らしいわね。」

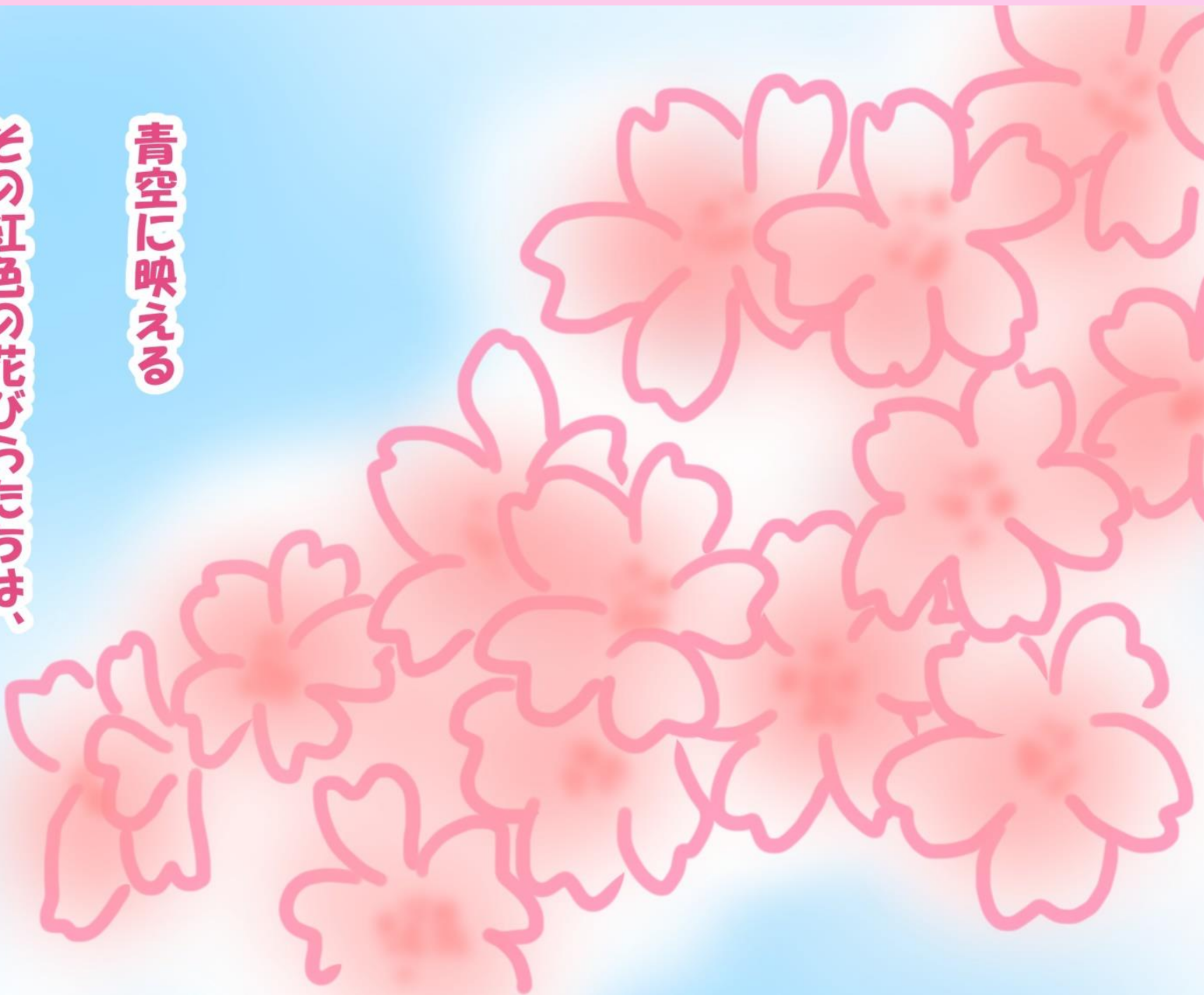


青空に映える

その紅色の花びらたちは、

今では堂々と

咲きほこっていました。





「ゆきのん、ありがとう。」

これで彼を喜ばすことが出来るわ。」

そう言ったベニカの瞳が、

キラキラと輝いています。

「ベニカ、

今とってもワクワクしてるわね。」

「うん、実は、勇気を出して

彼に話しかけてみようと思うの。」

私の想いを伝えるわ。」





「素敵だわ。」

それ、私にお手伝いさせてくれる？」

「いいけど、どうするの？」

ゆきのんは、

ベニカの心に宿った、

ワクワクの種に、

たっぷりとお水をあげました。

すると、

すぐにクローバーの芽が出て、

ベニカの心は、

ワクワクで満たされました。



「ゆきのん、本当にありがとう。」

私、もうちょっとも怖くないわ。」

ふたりは、手を取り合いました。

「ベニカ、こっちだよ。」

素晴らしい桜を見せてくれて、

ありがとう。

あなた今、

とっても美しくてキレイよ。

彼もきっと、

あなたの気持ちに応えてくれるわ。」



そう言って、ゆきのんは、

ベニカの後ろを指さしました。

ベニカがふりかえると、

そこには、

待ちわびていた気球が、

こちらにゆっくりと、

飛んでくるようでした。

終わり

